

新著紹介

近世に於ける「我」の自覺史

文學博士 朝永三十郎著

「我」の自覺史は單なる「吾」の自覺史ではない。「我」の發見は凡ゆる外的權威——例へば習俗の教權とか、社會的政權とか更には自然科學的理論主義の權威とかに對する反動に起因するが、見出されたる「我」の深刻なる内省に出でざる限り、「我」の自覺は遂に膚淺なる「吾」の覺醒に終らざるを得ない。超個人我と自律我との發見に眞なる「我」の自覺が始まるものとすれば著者の眞意がカント以後の「我」の自覺史にあることも明であらう。カントによつて發見せられたる「我」がヘーゲルに至つて形而上學的實在化をうけ一旦自然科學的唯物論によつて阻止せられ更に新理想主義の復興となる發展の徑路はやがて著者の言ふ、精神必然的、自然必然的及目的觀批判的の三大區分に外ならぬ。本書の目圖するところも第一編に於いて叙述せられたる思想の變遷——「我」といふ概念を中心とした——に、第二篇に於て明確なる學的基礎を與へんとするにあると思ふ。殊に最後の節に於て理論的形而上學說の難點を批判的立場から解明し、理想主義と新理想主義との異別を明説することによつて著者の根柢に横はる批判的思想を見ることは吾々の大なる喜びである。

然しながら本書の目的は、單に「我」の思想の變遷と三様の考へ

方との學的論究を以て終るものではない。著者の考へから言つても哲學の二要件は嚴密に學的であると言ふ事と、人生に對して指導の力を有する事とでなければならぬ新理想主義の背景といふ副名はやがて後者の企圖を寓したものではなからうか。そして「我」の自覺史は同時に「吾」の自覺史ではないであらうか。哲學史家の常套語を更に踏襲して近世思想の發展と希臘に思想の開展との間に顯著なる並行があると言ふならば、近代思想を過去五十年の短日月に縮刷して繰返した觀のある吾が明治思想史は「我」の自覺史によつて教へらるゝ所多からざるを得ないであらう。「我」の自覺史は同時に吾の自覺を促す啓蒙の書でなければならぬ。「我」の自覺史は單なる「吾」の自覺史ではないが、同時に切實なる吾の自覺史でなければならぬ。(寶文館發行定價壹圓貳拾錢。中川得立)

哲學概論 (哲學叢書 第三篇)

文學士 宮本 和吉著

「哲學に對する要求が個人を取つて考へても時代全體を取つて考へても顯著に高まりつゝあることは、現代生活の思想方面に於ける注目すべき事實である。」

これ本書の冒頭に宮本學士が掲げて居る語である。全く其通りで近來、心の溺を癒すべき活水を内觀の世界に求め、哲學研究に志するものが日々に多くなつて來る様であるのは甚だ喜ばしい現象と云はねばならぬ。

かういふ志の人達に分りにくい「哲學上の術語」や又さういふ語

であらはされる「哲學問題や又其問題の學問的取扱方」に通じさせるのが哲學概論の特有の任務である。それで従來我國に於てもパウルゼン、ヴント、キユルペ、アイスラー、イェルサレムとか又は桑木博士の著とかが廣く讀まれ又翻譯紹介されて居る。

ところが元來哲學概論といふものはかういふ任務を持つて居るからして、ある一人の學者の學說を叙説するのではなくして哲學の問題や其解決に對して思维的決定の最も廣い眼界を開くものでなければならぬ。無論萬人の等しく首肯する様な一大哲學體系があらう筈はないからこれはある程度迄の問題であつて、哲學概論は哲學入門の手引たると共に又其著者の立場を最も廣い背景に於て祖述するものであることは争はれない。従つて哲學概論を書く學者は先づ出来るだけ正しい哲學上の立場に立ち、「眞の意味に於ける哲學的思索」を行つて居る人たるを要する。

然らばどういふのが正しい立場であり、眞の意味に於ける哲學的思索であるのか。これには色々議論があることであらうが今こゝには詳しく論ずることはやめておく。なぜかなればそれは哲學上の論争を悉く詳説するのと同じ事になるからである。

然しこれだけの事はたしかに云へるだらう。カント以來知識の妥當性、もつと精密に云へば普遍妥當的價值といふ事を度外視する哲學はもはや獨斷として排けらるべき運命をもつて居る。而して又此普遍妥當的價值を對象とする哲學の必然的手段として批判的方法といふのが必らず取らねばならぬ途である。

今こゝにある一人の學者があつて自らはかういふ立場に立脚し尙これに加ふるに深奥なる哲學史上の學殖と科學的研究の素養と

があり、しかも其精練せる思想を豊麗圓熟な筆でもつてあらはし一の哲學概論を書いたとする。我々は殆ど内容を一讀するに及ばずして斯學に志す何人にも推賞し得る結構至極な書であることを斷言する事が出来る。我々は事實かういふ書物をかの昨年未學界が不意の訃音を傳へて等しく悼み惜んだところのウインデルバンド其人の最後の著即ち千九百十四年に出した哲學概論(Enleitung in die Philosophie)に於て見出すものである。而して今此文の標頭に掲げて居る書物は篤學の士宮本學士がこれを「出来るだけ自分のものとして多少の取捨選擇を加へて解脫(説?)的叙述を試みた」ものである。

本書は叙述の順序に於ても原著と異なる所なく、哲學問題を大體上この學の理論的意義と實際的意義とに従ふて知識問題及價值問題に大別し、前者は更に實在問題、生成問題、認識問題の三大區分に分たれて居る。又後者即ち價值問題は論理問題、美的問題及宗教問題に區分せられて居る。各章節の叙説は著者が自ら述べて居る様に「原書を貫く一の統一的根本的見地の力強き論理的辯證的開展」が可成忠實にあらはされて居て全篇を通じてどこかに原著者の精神が活躍して居るのを感じることが出来る。

文章も平易明快とは云へないかも知れぬが、かゝる種類の書物としては先づ分り易く且正確に書かれて居ると云ふて差支ない。四百三十頁の原著を此小冊に纏められた手腕は敬服の外はない。

一體哲學の書物はある點から云ふとカントがニュートンに對して云つたやうに「學者の最高の思惟産物に於ても、誰れでも隨いて行かれない、理解し難いものは一つもない」筈ではあるが然し

内容が内容だけに新聞の雑報や講談小説のやうに誰にでも分る様にとは行くまい。自分の先輩某氏が嘗て中學生時代に誰かの哲學概論の譯書を人から借りて来て三國志でも讀む氣で讀いて見たが第一頁の初から概念とか範疇とか其當時の中學生の學力では全く分らない語にぶつつかつて嘆息して巻を閉いた事が今でも同人間の笑話になつて居る。今日の學生は一般に進んで居るからこの様な事はないだらうが然しそれにしても此種の書物はある程度以上に平易に叙述する事は内容の性質が許さない所である。

又もう一つの困難は日本には種々の哲學史的の聯想の伴ふて居る一定の哲學的術語といふものがない事である。勿論明治の初、學界の先覺達が西洋から術語を輸入して經書や佛典から得來つた譯語によつてこれをあらはし今日廣く一般に行はれて居るのも少くはない。然しまだ改良を要する生硬の譯語や又同一の事柄を十人十色様々な語によつてあらはさうとして居るのも少くない。これは何も特に本書について云ふのではない。只こういふ次第であるからありふれた仕方ではあるが巻尾に初學者のために和獨對照の語彙をつけるだけの親切が欲しかった。

之を要するに本書は哲學入門の士の一讀すべきはもとより、然らざる者もウインデルバンド、リツカートを中心とせる西南獨逸派の學說の一斑を窺はんと欲するの士に大に推擧するの價ある近來の良著である。妄評多謝 岩波書店發行 價一四二十錢

(勝部謙造)

プラグマテイズムの倫理說

文學士 福井晋太郎著

近代の末華より現代に亘る西洋倫理學史を研究せんとする著者の企圖の一部分として、昨年の哲學雜誌に掲載せられた論文を、少しく修正し、更に「絶對的道德と不滅の觀念」の一章を増補されたものである。主觀主義、相對主義に陥るプラグマテイズムが絶對的道德を認めたまか如何かといふことや、宗教との提携厚き實用主義に於いて、不滅の論は蓋し見逃し難いからであらう。

最初に認識論としてのプラグマテイズムを概説し、進んで此の論の上に立つた倫理說の立場を明かにし、道德的理想論に入つて居る。一昨年の哲學雜誌に Horne, Free Will and Human Responsibility の紹介を連載せられた著者の論述は、自由意志論に移つて更らに詳細である。續いて、意志の自由を主張する點より將きに向ふべき改善說を論じ、「道德的行爲と知的作用」との關係を吟味し、「絶對的道德と不滅の觀念」に轉じ、「餘論」の章下に、實用主義者の唱ふる倫理說の批評を試みられて居る。

新方面を拓いて貢獻する處大なるプラグマテイズムの倫理說に關する此の著述が、單行本として出版せらるゝに到つたのは、プラグマテイズムの倫理說を知らんとする者には勿論、プラグマテイズムそのものを研究せんとする人に取つても、妙からざる便利なことである、*fortunate*なことであると思ふ。(尾生光三郎) 東京市京

橋區南傳馬町二丁目、目黒書店發行 菊版一九五頁 定價六十錢